

深川あやかし屋敷奇譚

笹目いく子 Ikuko Sasame



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

たたり振袖

5

生き人形

85

化け猫こわい

159

百物語

211

たたり振袖

(一)

縁側にある口の広い赤絵の深鉢で、金魚がぼちゃり、と小さな水音を立てた。

夕餉の膳を運ぶお凧が通りすがりに目をやると、すっきりとした形の和金と長く華やかな尾鰭を靡かせる琉金とが、追いかけて遊ぶ様子がちらりと見える。

葉月の晦日も近い夏の終わりに。

駆け足の夕立の後、少しばかり涼しくなった風に、誰もがほっとしている黄昏時のことだった。

「おや……」

縁側で団扇片手にあぐらをかき、のんびり涼を取っていた青年が呟いた。月代は青々とし、頬は白く滑らか。黒々とした鬢に粋な細髻。どこか茫洋とした大きな瞳が童顔の印象を与えるが、まず優男と呼んで差し支えない容貌だ。波と笹舟を大きく描いた派手な浴衣に、これまた大胆な唐花文様の博多帯を締めた伊達な姿は、さながら役者を思

わせる。

青年は、名を仙之助という。

「お凧、お客人のようだよ」

歌うような青年の声に、膳を整えていた女中のお凧は手を止めた。慌てて茶の間から縁側に出る。涼風が顔を撫で、ちりん、と頭上の風鈴が鳴った。

縁側の前には、石燈籠を置いた池を中心に築山や草木を配した、風情のある中庭が広がっている。お凧は雲間から差す夕日に目を瞬かせ、聞き耳を立てた。確かに表の方角から、下男のお蔵が誰かと話している声が切れ切れに聞こえてくる。

「困りましたねえ。もう夕餉時だっというのに」

きゅつと顔をしかめてぼやいたお凧は今年十五。絶世の美女とは言えないが、くると表情が変わる物怖じしない瞳と、血色のいい頬や唇に愛嬌がある。たすき掛けにした袖から伸びる腕はすんなりとしていて、小柄な体はきびきび動く。屋敷には五十も半ばを過ぎた富蔵と、そろそろ三十路のお江津という女中が三年ほど奉公しているが、お凧は奉公に上がってまだ一年にも満たない新米だ。

この屋敷の主である仙之助は、浅草田町にある高級料理茶屋『柳亭』の二十五になる次男坊である。

一見すればいかにも垢抜けた風采の美男子なのだが、中身は掴みどころのない心太のような変人で、おまけに名うての遊び人ときているから手が焼ける。

数年前までは、暖簾分けして店を持たせてやろうとか、いい婿入り先を探してやろうとか、柳亭の店主や女将が散々心を砕いたらしい。だが根っからの放蕩息子である仙之助ときたら、

「嫌ですよ、そんな気ぶっせいなのは。こんな極楽とんぼに、商いだの婿だのが務まるわけないでしょう。どら息子に夢を見すぎですよ、おとつあんたちときたら。いやいや、おとつあんやおつかさんや兄さんに恥をかかせたくないから言うんです。店の名前に傷がついたらどうします？ それよりも、どこかに適当な屋敷の一つでももらえませんか。そうしたら大人しくのらりくらり暮らしますんで。その方がずっと安上がりだと思えますよ。ね？」

などと、お凧が母であつたら拳固を頭にお見舞いしたくなるようなことを、ぬけぬけとのたもつたそつだ。

しかし親も大甘なものだから、風光明媚な深川木場は島田町に、数寄屋造りの瀟洒な屋敷を与えたのだった。

そして仙之助は宣言したとおり、そこで誰憚ることなく、のらりくらりと趣味事に

耽つて暮らしている。その趣味事というのがまたふるつていて、いわく因縁付きの、がらくたまがいの珍品の蒐集ときたものだ。

怪しげであればあるほどいいと言つては、厄介払いをしたがつているお客から妙な品を引き受けるので、幽霊が出てくる掛け軸だの、ひとりでに歩き出す生き人形だの、触ると呪われる石だの、笑う箆笥だのといったものを持ち込む客が後を絶たない。

「そんなもの、まがいものに決まっているじゃありませんか。ごみを増やすのはやめてくださいませんか」

お凧は毎度目を三角にして止めるのだが、それでも五回に一回くらいは妙なものをこつそり受け取り、いつの間にか屋敷の中にながら増えてしまつていく。ついには屋敷は「あやかし屋敷」と揶揄され、主に至つては「天眼通の旦那」などという胡散くさいあだ名をつけられる始末だ。お凧にしてみれば、「あやかし屋敷」はともかく、仙之助の目は天眼通ではなく節穴の間違いとしか思われぬ。

ただでさえ夕餉時だというのに、客に長居をされたら迷惑だ。たいてい仙之助は客と話し込んで時を忘れてしまふし、お凧は主の挙動を見張つていなくてはならないから、家事に大いに差し支えるし腹も空く。

「またしょうもないがらくたを持ち込もうつていうお客様じゃありませんか。適当に

言つて出直してもらいますから」

そう言つて縁側を下りようとすると、仙之助が慌てたように追ってくる。

「追い返しちやいけないよ。できるだけ手短に済ませるからさ、頼むよお凜。すごい珍品を持ってきたお客だったらどうするんだい。もし逃したら後悔してもしきれないじゃないか」

「珍品なんてあるわけございません。先日も、笑う箆筒なんてものを押し付けられたのをお忘れですか？　なんですか、箆筒が笑うつて。馬鹿馬鹿しい。下駄が笑うならまだわかりますけれど」

「ゲタゲタゲタ、つて？　お前でも駄洒落を言うんだねえ」

手を叩いて喜びかけた主は、物騒な目を向けるお凜を見て笑いを引つ込めた。

「おまけに、膠で抽出しを貼り付けてあつて使いようがないし。邪魔でしようがありません。そうだ、壊して焚き付けに使つてもいいですか？」

「駄目だよ！　心ノ臓に悪いことを言うな」

仙之助が青ざめて悲鳴を上げる。

「力持ちのお前が言うつと冗談にもならないよ。私の大切な生き人形もどこかへやつちまおうとするしさ。どうしてあれの素晴らしさがわからないかなあ。あれはな、ひとりり

に歩く、怨念おんねんまみれの、それはそれはおぞましい、崇られた人形なんだぞ！　そら、ぐつとくるだろう？」

ぐつとはこないが、どうも奉公先の選択を誤つたのではあるまいか、というお凜の疑念は深まるばかりだ。

「あれが歩いたことなんてないですし、歩いたからどうだとおっしゃるんです？　掃除や使いを頼めるのなら役にも立ちますけれど」

「お前、呪われた人形に掃除だの使いだのをさせようつて魂胆なのか。恐ろしい娘だな……」

顔を引き攣くわらせる青年に、お凜は心外な気分で頬を膨らます。

「あの人形も、私が着物を仕立て直してやつて、やつと見られる姿になつたくらいにほろぼろだったじゃありませんか。余計な手間を増やさないでくださいまし」

「うんうん、お前の裁縫の腕はなかなかどうして立派なものだ。お陰でいかにもおどろおどろしい、怪異でござい、つてな人形だったのが、すっかり毒気が抜けちゃつてさ。どこにもある人形みたいになつちまつて切ないよ。祟りも呪いもお前にかかると形無

しだ……」

恨めしげにそう零こぼした仙之助は、ほらほら、と庭の方を指し示す。

「夕餉がどどん遅くなるよ。お客さんをお待たせするもんじゃない」

「——わかりました」

しぶしぶ応じたお凜は、駒下駄を引つ掛けると、雨に濡れた庭の飛び石を踏んでいった。「お待たせいたしました」

枝折戸を出て声をかけた途端、表庭にいた富蔵と客人が同時にこちらを見た。

「こちら様が、どうしても旦那様にお目にかかりたいって、一点張りだな」

地蔵顔を当惑させて、富蔵がごま塩の鬢を搔く。

「ご繁多な時分に相すみません。ですが、ぜひともお願い申し上げます」

客人は思い詰めた様子で言い、腰を屈めた。見たところどこかのお店者であるらしい。清潔な細編の着物にぱりつとした黒い前垂れを締め、屋号入りの手入れの行き届いた藍の袴纏を纏っている。整った鬘やきれいに髻を当たつた顔からして、身代の大きな店の奉公人だろうとお凜は察した。年の頃は二十四、五だろうか。すらりと引き締まった体躯に、童顔の主とは正反對の、切れ長の目できりりとした面立ちをしている。背中に風呂敷包を背負っているのを見て、嫌な感じだ、とぴんときた。

「主に御用でございますか」

警戒心も露に尋ねるお凜に、へえ、と男が畏まる。

「手前は深川八幡の門前仲町にありますが古着・太物屋『すえ吉』の手代、藤吉と申します。こちらの旦那様が、珍しい、その、いわゆる付きのものを蒐集しておられると耳に挟みまして……お見せしたいものがあり、参りました次第です」

やっぱり。お凜は小さな唇をへの字に結ぶ。だが、むやみに追い返すわけにもいかない。「左様でございますか。お持ちになられたいわく付きのものは、一体どのようなお品でしょうか」

まずは主人に御用の向きを伝えて参りますので、と付け加えると、藤吉と名乗った男はごくりと喉を鳴らした。

風呂敷の結び目を握った手に力がこもる。目を向けて、お凜はそつと息を呑んだ。寒くもないのに、袖からのぞいた男の腕にびっしりと鳥肌が立っている。

藤吉は光を失ったかのような虚ろな目をお凜に向け、やがて掠れた声を発した。

「……振袖。呪われた振袖でございます」

静けさに満ちた座敷に、添水の、かこん、という涼しげな音が響き渡る。

「ふーん、これは……」

膝の前に置かれたものに見入っていた仙之助が、深々と嘆息した。

障子の外の坪庭では、雨に濡れた鮮緑の楓が、黄金色の夕日を受けて燃えるように輝き、添水そらすに流れる水がちよろちよると耳に快い音を立てている。その風趣ふうしゆな庭に臨む座敷で、仙之助は藤吉という手代てだと向かい合っていた。

二人の間には、藤吉が持参した風呂敷包が広げられている。

包まれていたのは、目にも鮮やかな赤地に吉祥文様が描かれた、一枚の振袖だった。

「実に、野趣やしゆあふれる着物ですなえ」

なるほど、うまいことを言うものだ、と茶を運んできたお凜は胸の内で呟いた。美しい、でもなく、艶あでやか、でもない。野趣やしゆあふれるとしか言い表しようがない。

何しろ、袂たもとと裾すそが黒と茶に焼け焦げているのだ。

「へえ。これは三月みづきほど前に、富沢町の朝市にて仕入れた着物でございます」

藤吉がきつちりと正座して菌切れよく応じる。

すえ吉は、仲町の本店の他、四谷伝馬町よつやでんまちょうと富沢町にも店舗を持つ古着・太物商だそうだ。木綿や麻などの反物はもちろん、裕福な武家や町人向けの高価な古着も多く扱っているという。

「仕入れた当初、この振袖は、古着といっても仕立てたばかりのように新しい上に、贅ぜい

を尽くした逸品でございます。そのためすぐに売るのではなく、客引きのために本店に飾っておこうと旦那様がおっしゃいました」

本店の土間に面した座敷の衣桁いこうに飾った振袖は、それはそれは華やかで人目を引いた。赤い振袖は評判を呼び、お客の足は引きも切らず、店主も奉公人たちも拾いものをしたと喜んでいたという。

「ところが、半月ほど経ったある晩」

男の口調が俄にわかに俄よどに淀む。

「その振袖が、火を出したのでございます」

「火、ですか？」

仙之助が顔を上げる横で、お凜も思わず聞き耳を立てた。

「はい」

藤吉の喉仏がぐつと動く。

「振袖をかけてある衣桁いこうあたりから煙が立ち上っているのを、夜中に手前が見つけました。慌てて着物を外して火元を確かめようとしたところ、衣桁いこうがぼうつと燃え上がりまして……」

火事だ、という藤吉の叫び声に他の奉公人たちも飛び起きた。布で叩いたり水をかけ

たりしたところ火はすぐに収まった。しかし、原因がはっきりしない。台所は遠いし、煙管がそばにあったわけでもなかった。火事が何より恐ろしい江戸であるから、皆每晚念を入れて、きつちり火の始末をして床についているのは言うまでもない。不可解極まりない小火であったが、振袖は無傷であったし、衣桁が少々煤けた程度で済んだ。とりあえずはよかったと、皆で胸を撫で下ろしたのだった。

「しかし……」

男の声が暗く翳る。

「また、火が出たんですね？」

仙之助が言った途端、かこん、と添水が鋭い音を響かせた。

藤吉は強張った目で仙之助を見つめる。

「そのとおりでございます」

二度目は、皆がその小火騒ぎを忘れかけた一月後に起こった。

「その振袖をいたくお気に召されたお客様がおられました。大層な高値をつけてくださいましたもので、旦那様もお売りすることにしたのです。それで、解れや傷みがないか、職人たちが隈なく検めることにいたしました」

その時、職人たちの仕事場に、店のお嬢さんで十九になるお菊が通りかかったのだと

いう。普段から仕事場にやってきて針仕事を習っていたというお菊は、振袖に興味を示しぜひ羽織つてみたいと言った。

「まあ、着ていただいた方が仕立ての良し悪しもわかりやすいものでございますから、纏つていただいたのです」

燃えるように赤い振袖は、若いお菊の白い肌によく映えた。よくよくいい品物だと皆で感心しながら眺めていたその時。

「お嬢様が、大声で叫びはじめたのです」

熱い、熱い、と娘は突如悲鳴を上げてものがきだした。見れば、振袖の裾や袂からぶつぶすと煙が立ち上っているではないか。

何が起きたのかと呆気にとられる皆の目の前で、赤く透き通った炎がさあつと立ち上る。そして蛇のようにお菊の体に絡みつくなり、みるみる燃え上がった。

「それはもう、恐ろしい光景でございます」

藤吉の張り詰めた声を聞きながら、お凧は知らず息を止めていた。

「皆でお嬢様の着物を叩き、泣き叫ぶお嬢様に水をかけ、どうにかこうにか、消し止めました」

火が出た。それも、二度ともこの振袖のそばから。

「着物を調べましたが、焼け焦げていたこともあり原因は判然といたしません。とうとう皆、この着物には何か禍々しいものが取り憑いているのではないかと、恐れはじめたのです」

青ざめている手代とは反対に、つややかな瞳を輝かせた仙之助が感じ入った風に唸る。

「まるで、梅野の振袖のようなお話ですねえ」

背筋が寒くなるのを覚えつつ、お凜も内心で頷いた。

梅野の振袖の怪談話は、江戸者であれば知らぬ者はない。何しろ、明暦三年に江戸の大半を焼いた丁酉火事は、この梅野の振袖から名を取り「振袖火事」とも呼ばれているのだから。

麻布の質屋の娘であった梅野は、本郷の本妙寺の小姓である美少年に恋をした。そして、少年が纏っていた着物と同じ柄の振袖をあつらえてもらい、それをかき抱いて少年に恋い焦がれていたのだった。しかし、娘はかなわぬ恋に思い悩み、憔悴のあまり命を落としてしまう。

葬儀の際、梅野の棺桶には件の振袖がかけられていたが、それは寺男によって売りに出され、上野の町娘であるきのの手に渡る。ところがきのもほどなく命を落とし、葬儀の際に再び棺桶にこの振袖がかけられた。寺男はまたもこの振袖を売り、今度は町娘の

いくの手に渡る。そしてこのいくも、やはり病で命を散らすのである。

さすがに気味が悪くなり、寺男たちがこの振袖を焼いて供養しようとした時、振袖は火がついたまま舞い上がり、寺の屋根にふわりと落ちて隣間に燃え上がった。かくて、この火が江戸の大半を焼き尽くす丁酉火事の発端となったのだという。

「手前どもも、これは梅野の振袖の再来ではないかと噂しております。お嬢様はお気の毒にもお御足に火傷の跡が残り、決まりかけていたご縁談が流れてしまいました。旦那様はこの振袖は崇られているとおっしゃって、すぐ処分しようとなさいました。ですが……」

お寺に焚き上げをお願いして、かつての大火のようになっただらどうする、とはたと思いつたのだという。

「とんだ思い過ごしであればよいのですが、江戸の大半を焼く火を当店の振袖が出すようなことになれば、取り返しがつきません。どうしたものかと頭を悩ませておりましたところ、こちらのお屋敷の旦那様であれば、と奉公人の一人が言い出したのでございます」

「ほう」

仙之助が面白そうに小首を傾げた。

「いわく因縁付きのものを集めていらっしやる千里眼のお方だと、もっぱらの噂だそう

ですわね」

藤吉が上目遣いに恐々と言う。

「天眼通の仙之助様、と伺いました。その、崇りだとか憑きものだとかを、見分けてしまわれるとか……」

「まさか」「まさか」

仙之助の嬉しげな声に被せて、お凜も平たい声で呟く。

「私はただの好事家です。しかしまあ、これでも見る目はある方だと、少々自惚れてはいますわね」

まんざらでもなさそうな主に向かって、手代は真剣な表情で身を乗り出した。

「では、この振袖が本当に崇られているのか、おわかりになりますか？」

「——もちろん」

掴みどころのない、無邪気な瞳がきらりと光る。藤吉は緊張で顔を強張らせ、固唾を呑んで仙之助の言葉を待つ。

「わかるわけではないですよ。いくら私でもね、今はじめて見たんですもん。あはは」

藤吉が脱力するのをよそに、滑らかな月代を白い手でべちんと叩き、あつけらかなと言ったものだ。

「しかし、実に面白そうな品ではありませんか。ぜひとも手元に置きたいものです。譲っていただけますでしょうね、藤吉さん」

「そ、それはもう。願ってもないことです。ただ……」

がくがく頭を上下させた藤吉が、躊躇うように振袖と仙之助の顔を交互に見る。その様子に仙之助は小さく笑う。

「ここで火を出すのではないかと、気にかかりますか。大丈夫、その心配は無用です。うちにはこの、お凜がおりますからね」

突然話を振られ、お凜はその場で目を剥いた。

「何を隠そう、このお凜ときたら、崇りも呪いも撥ね除けてしまう娘なんですよ。いや、崇りも呪いもこの子を避けて通ると申しましょか。おまけにとんでもない力持ちときてますしねえ。鬼も裸足で逃げ出すんですから、高僧の霊験あらたかなお札やお経よりも効果があるというもので。ま、たとえて言えば樟脳みたいなものです」

花も恥じらう十五の乙女を捕まえて、鬼も逃げ出すとは何事だろう。おまけに言うに事欠いて樟脳とは。人を虫除けみたいに、とお凜は眉を吊り上げる。そりゃあまあ、深川大和町の両親が営む蕎麦屋で育ったお凜は、外番の出前もなんなくこなし、大の男も顔負けの力持ちで鳴らしたのだが。

そのお凜に、藤吉が半信半疑の視線を送る。

「はあ、それは頼もしいことで」

「そうでしょう。振袖に樟脳しょうのう、びつたりじゃありませんか」

仙之助は、我ながらうまい例えだ、などと能天気なまけいに笑っている。夕餉ゆうげのおかずを一品減らしてやるう、お凜は固く心に決めた。

「そうおっしゃっていただけますのなら……どうぞよろしくお願い申し上げます」

納得したようなしないような風情ふうせいで頷くと、藤吉は最後に深々と頭を下げた。

庭で楓かへの葉がざわめき、添水そけいずがまた、かこん、と鳴った。

「振袖の祟りかあ。いいねえ、ぞくつとして。こう、いい具合に涼しくなるよ」

ぼりぼりと小気味のいい音を立てて沢庵たくあんを咀嚼そくくしながら、茶の間の膳ぜんの前に座した仙之助が機嫌よく言う。惚れ惚れとした視線の先には、衣桁いこうにかけられた赤い振袖があり、おどろおどろしくもきらびやかな姿を二人の前に披露している。

「こんなものを押し付けられてしまって。食欲が失せやしませんか？」

また屋敷にがらくたが増えた、とお凜はげんなりする。

「どうしてさ？ こいつを眺めながら飯三杯はいけるね。崇られた振袖だけ。最高じゃないか」

仙之助は優男風の顔をうっとりとし上気させ、変人ぶりを発揮している。おかずの煮穴にあな子三匹を二匹に減らしてやったのにも、とんと気づいていないらしい。

「この振袖から、本当に火が出たんでしょうか。どうせまたまがいものなんじゃございませんか？」

「なんということを言うんだ、失敬な。どこからどう見たって呪われてるじゃないか。この禍々ままがしさ。この忌まわしさ。ああ、美しい……」

難儀な性癖もあつたものだ、とお凜は天を仰ぐ。陶然とうぜんとして振袖を見上げる青年の箸先が、かつんと空の皿をつついた。

「お凜や。今日の煮付けは少なかった気がするよ」

「そうですか。でも振袖をおかずにすれば、あとご飯二杯はいけるんですよね？」
のっぺりとした声で返すと、仙之助は一瞬わび詫しげに皿を眺め、

「ま、いいか」
と飯を頬張る。

「そうだ！ お凜が羽織って見たらどうだい」

急に青年の顔が輝いた。

「何をです？」

「だから、この振袖をだよ。本当に呪われた着物なのか、お前も気になるだろう？」

突然何を言いつ出すのか。啞然とするお凜を横目に、仙之助は茄子の浅漬けをうまさうに噛み締めている。

「大丈夫、祟りも呪いもお凜を避けて通るんだから。何も起きたりしないよ。ね、やってみようよ」

またそれか、とお凜は眉根を寄せる。どういうわけか、この主は本気でお凜が「妖しいもの」を寄せ付けない体質だと信じ込んでいるのだ。

そもそも仙之助に雇われた行立も、この性質を見込まれたことだった。自分の趣味を手伝う奉公人が欲しいけれども、簡単に怨念だの怨霊だのに取り殺されては困る。

その点、お凜ならばうってつけだ、とある時持ちかけられたのである。

お凜が奉公するようになってからというもの、いわく付きのお宝たちがやけに大人しくなってしまうって大誤算だ、などと仙之助はぼやくし、屋敷のうちで妙な物音や気配に悩まされることが減った、などと奉公人たちは安堵している。しかし、そんなことを言われたところで、お凜にはちつともびんとこない。

そりゃあ、生まれてこの方怪異にお目にかかったことなどないが、たいていの人はそういうものではないのか。けれど、お凜がいくら抗議したところで、「お前はわかってないねえ」とへらへらした返答があるばかりなので、今や反論する気も失せている。とはいえ、変わり者の旦那の奇天烈な趣味に付き合わされることさえ我慢していれば、大した労苦もない恵まれた奉公先である。樟脳呼ばわりされる居心地の悪さくらい、我慢できる。

いや、崇られた振袖を着てみると命じられる奉公先というのは、充分とんでもないのではないだろうか。どうも己まで、この主の変人ぶりに毒されてきているような……

「では、私が羽織ってみても意味がないんじゃないやありませんか？ どうせ何も起こりやしませんよ」

「それだよ」

ぱちちりと丸い瞳をこちらに向けて、青年は屈託なく笑う。

「もし火が出たら、これは怪異じゃあないってことになる。火が出なかつたら、原因は怪異ってことだ。どうだ、いい考えだろう」

そんな理屈があるものか。仙之助の願望にばかり都合がいい気がする。お凜は白い目を青年に向けた。

「怪異でなかったら私が燃えますすけれど」

「すぐ消してあげるから、大丈夫だってば」

「じゃあ旦那様が着てみたらいかがですか。消して差し上げますよ」

仙之助が小馬鹿にした風に目を丸くして、指の長い優美な両手をひらひらさせた。

「何言ってるんだい。こいつは振袖だよ。男が着たって仕方がないだろう。お前はしっかり者なのに、時々肝心なところが抜けてるねえ……っていうのは冗談、冗談！」

もう下げますね、と能面を作ったお凜が膳を掴んだので、必死の形相で引つ張り返す。「わかった！ 明日は『越後屋若狭』の練り切りを買いに行こう。好きなものを選ばせてやる！」

「越後屋若狭？」

「越後屋若狭！」

膳を掴んだまま、やけくそのように仙之助が叫ぶ。

本所一ツ目橋に程近い上菓子屋の越後屋若狭といえは、江戸中にその名が轟く名店中の名店で、予約をしなくては菓子を買うことすらできないことで有名だ。ところが、名店柳亭の次男坊という肩書きのお陰で、この主は予約不要の来店が許されているのだった。あそこの菓子はそりゃあふるえるくらい絶品だ。魂まで蕩けたようになって、仙

之助のがらくたが屋敷の中に増えているのにも気がつかぬくらい、数日の間幸福感が抜けないのだ。

「……きつとですよ」

念を押して膳から手を離すと、仙之助は赤べこのように勢いよく頷いて、取り上げられては大変とばかりに、もりもりと飯を口に運んだのだった。

日ごとつぷりと暮れて鈴虫がりんりんと鳴きはじめる頃、怪異を見極めるべく支度に取リかかった。

富蔵とお江津も加わり、茶の間から台所の広い土間へと慎重に振袖を運ぶ。万が一火がついた時のために、周囲に水を張った大小の桶をいくつも用意しておく。燃えやすそうなものも勝手口から庭へと運び出した。

「旦那様、本当にやるんですかい？」

「呪われた振袖だなんて、おっかない。お凜は大丈夫なんでしょうね、旦那様？」

たすき掛けした富蔵とお江津が、それぞれ腕に手桶を抱えて不安げな声を発する。

「大丈夫だと言ってるだろう。まあ、もしも火が出たら、桶の水を片っ端から浴びせる

んだぞ。さ、お凧、いつでもいいぞ。景気よくやっておくれ」

土間に片膝ついて桶に手を置いた仙之助が、目を輝かせて威勢よく言う。豆絞りの手ぬぐいのねじり鉢巻に、袖はたすき掛けして、尻端折りにした出で立ちときたら、これから深川八幡の神輿でも担ぎに行くかのような気合の入れようだ。

「景気よくと言われましても……」

嘆息しつつ、お凧は板敷に畳んで置かれた振袖を手を取った。絹が手にやわらかく、ずしりとした重みがある。燭台と行灯の明かりに浮かび上がる紅色はやはり美しい。ちらりと仙之助をうかがうと、真剣そのものの表情で大きく頷く。

火なぞ出るわけがないと思いつつも、なんだか落ち着かぬ気分には襲われる。

深く息を吸う。さっと着物を広げ、えいっとばかりに袖を通した。

赤く輝く奔流が体を包み、束の間目が眩む。

張り詰めた空気が土間に満ち、一同は息をひそめて身を固くする。

「どうだい」

やがて、そろそろと主が囁いた。

お凧は眉間に皺を寄せ、たつぷり十数えてから重々しく頷く。

「着心地は、悪くありません。仕立てもいいんでしょね。裕ですし、寒い時期に着た

らさぞ暖かいでしょう。ぼろぼろでなかったら、ですが」

「あ……そう」

今にも水をかけようと身構えていた仙之助が、がっかりしたように首を傾げた。何を期待していたのだ、何を。

よかった、よかった、と富蔵とお江津が手桶を下ろして口々に言うそばで、青年は一人考え込んでいる。

「ということ、これは怪異だってことだ。うん、間違いない。よかったじゃないか。火を出すところを見られなかったが、これで本物の祟りだとわかったわけだ」

やっぱり火を出すことを期待していたのか。聞き捨てならぬ発言に、振袖を脱いだお凧は主を剣呑な目で睨む。

「何故そうなるんですか。怪異でもないし、種も仕掛けもない、ただの振袖だということじゃありませんか」

「じゃあ、どうして二度も火が出たと思うんだい？」

幼子のようにやたらと澄んだ瞳で問われ、答えに詰まった。

「妙な話だ。そうだろう？」

それは、そうだ。ただの振袖は勝手に燃え上がったりはしない。かといって、怪異だ

なんてあるわけがない。うーん、と考え込んだお凜に、仙之助は曇みかける。

「まあともかくだ。これでさえ吉は崇りの元を断てたし、私はお宝を手に入れた。万々歳って奴だね。いや、趣味と実益を兼ねるとはこのことだ」

喜色満面で大切そうに振袖を茶の間の衣桁へ運ぶ主を、お凜はなんだか釈然としない心地で見送った。祟られた振袖だなんてあるわけもないが、だからといって謎が解けたわけでもない。お宝を手に入れた、などと軽々しく喜んでいい話なのだろうか。

……そして、お凜の予感のとおり、話はそう簡単には終わらなかつたのだ。

(一)

翌日、一ツ目橋に程近い越後屋若狭で上生菓子を買った帰り道、せっかくだからと永代島の深川八幡に寄り道して、永代寺門前仲町にあるすえ吉を訪ねてみることにした。

お江戸で「なかちよう」といえば、深川八幡と通称される富岡八幡宮の参道である門前仲町を指すと相場は決まっている。茶屋がひしめき合う繁華な通りは、昼は八幡参りの参詣客で賑わい、名物の鰻や蛤を焼くいい匂いが漂っている。そして、夕暮れ時か

らは辰巳芸者が闊歩する深川随一の花街へと変貌し、参道は夜な夜な酔客であふれるのだ。

じりじりとうなじを焼く日差しと人いきれに汗をかきながら、一の鳥居に近い火の見櫓を望む参道を歩いていると、前を行く仙之助がそわそわとしはじめた。

「ああ、染吉と梅奴は達者になっているかなあ。近頃とんどご無沙汰だった」

鮮やかな露草色の紗の着物に、紫黒色に市松模様を織り込んだ紋紗の羽織、手には浅草『寶扇堂』の墨絵の扇子という通人風のこの青年は、染吉と梅奴という売れっ子の辰巳芸者に入れ込んでいるのだ。豪勢な貢ぎ物を贈るのはもちろんのこと、大枚をはたいて夜通し遊び倒すことも珍しくない。儉しい蕎麦屋の娘であるお凜には、まるで理解が及ばぬ暮らしぶりである。

「ねえ、お凜。お前、菓子を半分持って先にお帰りよ。一人で食べていいからさ。私はちよいと二人に挨拶して……」

「真っ昼間から何をおっしゃっているんですか。きりきり歩いてくださいまし」

面倒くさそうにお凜が言うと、あのねえ、と扇子を扇ぎつつ主が哀れみの眼差しを向けてきた。

「子供のお前には辰巳芸者の粹つてもんがわからないだろうなあ。辰巳芸者の気風によ

さつてのは、そりゃあいいもんでね。こう、侠きやんで威勢がよくてさ。男を足蹴にする勇ましさで、痺れるんだよねえ」

「あらそうですか。じゃ、私が蹴くつて差し上げますよ」

そう言うなり、鼻の下を伸ばしている主の踵かかとめがけて爪先を繰り出すと、仙之助は「うわ」と叫んで飛びすさった。道楽息子のわりには身が軽い。

「主人に向かってなんとということをするんだお前は！　なんだその、惜しかった、みたいな顔は」

青い顔をして歩き出した主の後を、お凧は澄ました顔でついていく。

やがて、ちり一つなく掃き清められた店先に、藍の暖簾のれんが清々すがすがしく翻ひらるすえ吉本店が見えてくる。江戸にいくつも店舗を持つだけあって、店構えはなかなかのものだ。出入りする客層も懐に余裕のありそうな町人や、粋筋らしい華やかな女人が目についた。店内は衣紋えもん掛けに吊るされた色とりどりの着物がずらりと並び、壁に作りつけられた棚には太物の反物がぎっしりと積まれ、繁盛ぶりがうかがえる。

「あつ、これは仙之助様」

土間に佇む二人に気づいた藤吉が帳場ちやうば格子の内から現れ、即座に座敷の端に膝を折る。

「昨日は厄介なものをお引き受けくださり、本当にありがとう存じます」

そう言うって、旦那様、と背後で客と談笑していた男に耳打ちをする。

「おお、柳亭の……これはこれは」

身なりのいいその男は、すつと表情を引き締めて二人に向き直った。

「店主の仁兵衛でございます。この度は、ご面倒をおかけ申し上げます」

丁寧に述べた仁兵衛は四十半ばというところか。勢いのある店の店主らしく体に精気が漲たかっている。だが振袖の件で心労を募らせているらしく、仙之助に向ける両目には抑えきれない疲労の色が見えた。どうぞ奥へ、と再三勧めてくるのを仙之助が断ると、仁兵衛はようやく折れて、帳場の近くに二人を招いた。

「その、いかがですか。あれは……何か悪さをしてはおりませんでしょうか？」

奉公人が茶と茶菓を置いて去ると、おそるおそる仁兵衛が尋ねた。

「いいえ、ちつとも。大人しいもんです。私がお預かりしたからにはもう安心ですよ。

どうぞお心安らかに」

「おお、左様でございますか。いや、こう申すのはなんでございますが、仙之助様に万が一のことがあってはと、お願い申し上げてから生きた心地もしませんで……。しかし、少し気が楽になりました」

目尻に人のよさが表れたような小皺こじわを刻み、店主はほっとしたように微笑んだ。

「ところで……」

仙之助が声をひそめる。

「ここで、最初の火が出たそうですね」

はい、と藤吉が進み出て、奉公人たちが忙しく働いている帳場の右手を指差した。

「あの、一番目立つところに衣桁を置いてございました」

ふうん、と主が目を細めて腕組みをする。お凜もそつと首を伸ばしてみたが、衣桁はすでに見当たらず、周りに火の気のあるものも置かれていない。どういいうわけで火がついたのか、ますます不思議だった。

——でも、着物から火が出るなんて、あるわけがないし。

「お嬢様がお怪我をなすったそう。おいたわしい限りです」

神妙な顔で仙之助が言うと、仁兵衛はぐつと唇を引き結んだ。

「ありがとうございます。あれには本当に哀れなことでした。一時は痛みで歩くことはおろか、眠ることさえままならないほどでございました。傷跡こそ残ってしまいましたが、命が助かっただけでもよかったと思うしかございません」

「失礼ですが、ご縁談に障りが出てしまったとか」

なんて失礼な、とお凜は抗議の視線を送るが、主は知らんぷりを決め込む。

「はい。大伝馬町の太物問屋『青松』の末の息子さんを婿養子にという話が進んでおりまして。結納品も揃えていたところだったのですが」

声に苦渋が滲む。大店である青松の末子は二十二で、お菊を大層気に入っていたらしい。だが、不吉な振袖の噂と、消えない傷を負ったお菊に、二親が難色を示したのだという。

ひどい話だ。世間とはそのようなものかもしれないが、まったくひどい——悶々とするお凜をよそに、仙之助はいかにも辛そうに眉を下げる。

「そうでしたか。お嬢様はさぞ気落ちしておられるでしょうね」

「ええ、それはもう。ですが近頃は、だいぶしゃんとして参りました。元はといえば、あちらの息子さんが娘に惚れ込んでおられましたね。手前味噌でございませうが、親に似ずちよいとばかり見目よくて、氣立てもいい娘でした。だが、火傷の跡がどうこうで縁談を投げる親御さんに従うんなら、所詮息子さんもその程度のお人なんですよ。そんなお人に大事な一人娘を嫁がせるなんざ、こちらから願い下げです。ご縁が流れて、かえってよかったですと思っておりますよ」

自分に言い聞かせるような、きつぱりとした口調で店主が言った。

「まったくです。おっしゃるとおり！ それはぜひともお嬢様のご芳顔を拝したいものですな……」

力強く同意した青年の目がちらちらと店の奥に向く。お凜が咳払いするやいなや、背筋を伸ばしてやたらと扇子を扇ぎだした。

「娘はまだ十九ですしね。体に傷があるうと構わぬという殿方が現れるまで、縁談なぞまっぴらだと啖呵を切っておりますよ」

仁兵衛がくすりと笑うと、後ろに控えている藤吉のきりりとした目元がやわらかく綻んだ。生真面目そうな瞳に驚くほど柔和な表情が浮かぶ。物静かで口数も少ないので、厳しい人なのかと思いきや、とてもやさしい人なのかもしれない。お凜は意外な気持ちで、そうつと手代てだいの顔を眺めていた。

「お店を訪ねたところで、藤吉さんの話以上のことはわかりませんでしたね」

店を辞して、鰻うなぎの香ばしい匂いや三味線の音が流れてくる仲町を歩きながら、お凜は青年の背中に向かって言った。

「うーん」

眠たそうな返事を寄越した仙之助が、こちらを振り向きにやりと笑う。

「いや、わかったよ。こいつは祟りだ。間違いない。でなければあんなところから火な

んぞ出ないさ。お前も得心しただろう？ 私は拾いものをしたよ」

やっぱりそうなるのか。嬉しげに笑う主の姿に、頭痛を覚えたお凜が空を仰いでいる

と――

「もし、もし、仙之助様。少々お待ちくださいませ」

背後から切羽詰せつぱつまった女の声が響いた。

振り返ると、若い娘が人波をかき分け近づいてくるのが目に入る。

「お知り合いですか、旦那様」

「さあ、覚えがないなあ」

扇子を扇ぎつつ青年が首を傾げる。

「仲町の芸者さんじゃないんですか？」

「私の知らない辰巳芸者なぞいるもんか。やや、別嬪べっぴんじゃないか」

柳亭の二親が嘆きそうなるのをたまってから、仙之助ははっと表情を引き締める。

息を弾ませ追いついてきた娘を見て、まあ、なんてきれいな人だろう、とお凜も目を丸くした。柳の葉のような優美な眉、吸い込まれそうに黒々と輝く双眸そうまう、繊細な頤おほほと滑らかで白いうなじ。ほっそりとした体つきときたら、今にも折れてしまいそうだ。蝉せみの翅のごとく軽やかな卵の花色の縮ちぢみに、大きな金魚を大胆に配した黒地の帯もよく映え

て、女のお凜でも見惚れるほどに美しい。

「おや、私をご存じで。失礼ですが、どなた様でしたでしょうか？」

仙之助はささっと鬢を撫で付けて羽織を整えるや、極上の笑みを浮かべて娘を見つめる。

「私、すえ吉店主の娘の菊でございます。あの振袖をお受け取りになったと伺いまして、心なしか青白く強張った顔で、娘が細い両手を揉むようにして言った。

「ああ、あなたが……」

目を睜った仙之助の隣で、お凜も驚いて息を呑む。それから、道理で、と得心した。病み上がりかか疑う細い体つきは、怪我から回復したばかりであるせいなのだろう。

「不躰なことをお願いし、申し訳ございません。ですが、あの振袖、あれはどうか、焼き捨ててくださいませんかでしょうか」

え、と訝しむ仙之助に、娘は涙目で言い募る。

「私は恐ろしいのです。あれは崇られております。どうか、どうかお願い申し上げます」

「お、お菊さん。ちよいと落ち着いて」

仙之助がたじたとして宥めるが、お菊は深く腰を折り、

「このとおりです。仙之助様、お願い申し上げます」

と悲痛な声で訴える。

すれ違う人々の視線が痛い。お凜と仙之助は啞然としたまま、娘を見下ろしていた。

「深川の八幡様」として親しまれる深川八幡、正式には富岡八幡宮は、永代寺の広大な敷地の中に位置する。

つまり寺の中に神宮があるわけなのだが、これには少々変わった由来がある。寛永の昔、この一帯が深川と呼ばれる前の頃、永代島という小島があった。そこに長盛法印というお坊様が京より現れて、ご神託を受けたとして八幡様を創建したそうだ。この時、長盛は永代寺という寺も建てた。この永代寺の敷地が広大で、富岡八幡宮がその中に含まれることとなったのである。お坊様が八幡を建てるといふのも不思議な気がするのだが、そこは神仏喧嘩せずというもの。まことに大らかなことだとお凜は思う。

その八幡様の境内には、これまた大らか極まりないことに水茶屋や料理茶屋がひしめき合い、およそ神域とも思われぬ歓楽地の様相を呈している。高級料理茶屋としてお江戸に名を馳せる『伊勢屋』と『松本屋』もこの境内にあって、どちらも仙之助の鼻屑である。

「伊勢屋か松本屋へ行きたいなあ……」

八幡様の賑々しい参道脇で、簡素な水茶屋の床机しょうぎに腰かけた仙之助がぼやく。

「お菊さんもあそこで遊べば元気が出るんじゃないかなあ。料理が絶品だよ？ ああ、三味線しみせんの音色が聞こえてくるようだ。染と梅を呼んでさ。いいと思わない？」

「思いません。元気が出るのは旦那様だけでしよう。芸者と遊びながら、どうやって呪いや祟りの話をしようっていうんですか？」

未練がましく二軒茶屋の方角を見つめる主にぴしりと言う。それからお凧はお菊に顔を向けた。娘は床机しょうぎに腰かけて、じっと手元の麦湯を見下ろしている。

振袖を燃やしてくれと必死の形相で訴えるお菊に面食らい、ひとまずどこか落ち着ける場所へ、とここへやってきたのだった。

「お菊様、あの、ご気分はいかがですか」

お凧がおずおずと声をかけると、娘が我に返ったように顔を上げる。

「大丈夫です。みつともないところをお見せして、大変失礼をいたしました」

「お父上からは、ずいぶんお元氣になられたと伺ったんですが、やっぱりそうそう吹っ切れるものじゃありませんよねえ。恐ろしい思いをなすった上にご縁談も流れてしまつたとなれば」

旦那様、と顔をしかめるお凧の横で、仙之助がやる瀬なさそうに言う。

一瞬、どういふ顔をしたものかと迷うように、お菊は目を泳がせた。

「ええ……そうですね。もうすっかり忘れたと思うと、急に思い出されたりしますもので」
 そうでしようねえ、と深く頷いた青年が、お菊にすうっと体を寄せる。

「しかし、もう恐ろしいことなどございませぬよ、お菊さん。あれは私がしっかりとお預かりしておりますから。この仙之助に何もかも、一切合切、お任せください」

無駄に美しい顔を寄せて熱っぽく囁ささやいたので、お菊が混乱した様子で身を反らせる。

「大伝馬町の馬鹿息子のことも忘れちゃいませぬ。ね？ というわけで、ばあつと遊びに行きませぬか。茶屋はいかがですか。歌舞伎はどうです。それとも舟遊びがお好きですか？ いいですねえ、しつとりと二人つきりなんて」

あらぬ方へ話を持つていこうとする仙之助に、娘は慌てて首を横に振る。

「あのう、せつかくですけれどそんなわけにはいけません。あの振袖は恐ろしいものです。どうかすぐに焼いてください。いえ、私が燃やしてしまいますから、お返し願えませんでしょうか」

硬い声でまた言い出したので、お凧と仙之助は顔を見合わせた。

「元はといえば、あの振袖とはある大店おだんのお嬢さんが、見合いの席に用意したもののな

だそうです。けれど、お嬢さんは急死なすって、振袖は人手に渡って転々とした挙句、富沢町の市に並んだのだと聞きました。ですから、あれにはお嬢さんの未練と怨念がこもっているのではないかと思うのです」

お菊が唇をふるわせる。

「あの振袖を羽織ったのも、今となつては正気ではなかったのだとしか思えません。私、頭の中で声を聞いたんです」

「声、ですか」

仙之助がすつと声を落とすと、ええ、と怯えるようにお菊は囁いた。

「恨めしい。幸せそうなお前が恨めしい。私を纏え。お前を……」

—— 燃やしてやる。

「そう声が響いて、気がついたらあれを身に纏つておりました」

夏の終わりの日差し暑さと、甲高い鯛の鳴き声が、急に遠くなった気がした。

禍々しい女の声を頭の中に聞いたように錯覚し、お凜は柄にもなくぞくりとする。

「きつと、悪いことが起こります。どうか、どうか、お願い申し上げます」

睫毛に白玉のような涙を溜めたお菊が、絞るように言った時——

「お嬢様！」

行き交う人をかき分けて走ってくる男が、大声で叫ぶのが耳に届く。

「藤吉……」

慌ててお菊が立ち上がったところに、血相を変えた藤吉が駆け寄った。

「ああよかった。急にお姿が見えなくなつたので、皆大騒ぎしていたんですよ。仙之助様とご一緒でしたか。……あのう、何かございましたので。お嬢様に御用でも」

藤吉は額に大粒の汗を浮かべ、困惑と疑念の入り混じった視線を仙之助に向ける。その目の鋭さにお凜はぎくりとした。

「いえ、なんでもないので。偶然お会いしただけで」

お菊が表情を強張らせ、手代の視線を避けるように俯く。

「なんでもないとおっしゃられても、お嬢様……」

「ああ、こいつはどうも申し訳ないことでした。藤吉さん」

食い下がる手代を遮るように、仙之助がぱつと立ち上がった。

「実はですね、私、お菊さんに一目惚れしちゃいまして。舟遊びにお誘いしたんですが、見事にふられてしまいました。こんなところで連れ出して相すみません」

「えっ……?」

あけすけに言い出した青年を、お菊と藤吉が嘩然と見つめる。

「店の外でちらつとお姿をお見かけして、眩まはゆいばかりのお美しさにくらりとこう……。ですが、まだ遊びに出かけるようなお心持ちには到底なれない、と叱られてしまいました。私としたことが、見境のないことをしてお恥ずかしい限り。それもこれもお菊さんの美貌のせい……ああ、なんと罪深いお人だ」

よろりとして切なげに胸なぞ押さえている。

「お菊さん、どうか堪こちえてやってください。あ、でも舟遊びのことは考えておいてくださいね。芝居でもいいですよ。仙之助はどこへもお供いたします。藤吉さんも、このとおりです」

反省しているのかしていないのかわからない調子でまくし立て、深々と頭を下げた。

「い、いえ。どうぞお手をお上げくださいまし」

「仙之助様、滅相もございません。どうか……」

お菊と藤吉が泡を食って口々に言う。

「それにしても、藤吉さんは心底お菊さんが大事なんですね。おちおち口説く隙もありやしない。これじゃあ悪い虫がつききょうもないですな」

閉じた扇子で額をこつんと叩き、仙之助が嘆息した。

「はあ。それはその。あんなことがございましたし、ようやくお怪我が癒いえたばかりで

すのでお一人にするのが不安で」

一瞬うろたえ、藤吉は額の汗を拭いながら恐縮する。

「これほど忠義な手代てだいがいるとは、すえ吉さんはご安泰だ。いい奉公人がおいでで仁兵衛さんが羨うらやましいなあ。きつと奉公して長いんでしょうね？」

「い、いいえ。手前など、まったく未熟者でございますまして……」

手代てだいは生真面目に応じてますます身を縮める。

「手前は四年ほど前まで、須田町すだちやうにある油屋の手代てだいを務めておりました。しかし、訳あって店を離れまして、そこをすえ吉の旦那様に拾ひろっていたいたのです」

「ほう、油屋の。そうでしたか」

仙之助は意外そうに目を瞬またたかせた。

「ですので、すえ吉の旦那様とご一家の方々には、お返ししきれぬご恩がございます。店に置いていただけだけでも、ありがたく存じております」

お菊を見た藤吉の目元がふつと緩む。瞳の厳しい表情が和らいで、別人のようにやさしげに見える。さっきもこの表情を見た、とお凜は思い返していた。すえ吉の店主が、お菊の話をしてきた時ときだった……

「藤吉は誰よりも身を粉にして働き、店に尽くしてくれます。藤吉なしでは店は立ち行

かないと、父や番頭がいつも申しております」

お菊が口角を上げて美しく微笑んだ。

「なるほど……」

仙之助は考え深そうに頷き、お菊の言葉にすっかり畏れ入った様子の藤吉に視線を向ける。それから、どこか底の知れない笑みを浮かべた気がした。

「幸せ……」

台所続きの板敷に座り、越後屋若狭の練り切りを味わいながら、お凛は一人身震いした。本日の若狭の薯蕷練り切りは、秋を先取りした桔梗と、こぼれ萩の二種である。技の極致と美意識の限りを尽くした細工は、黒文字を入れるのが罪に思われるほど完璧だ。もっちりとした滑らかな生地と、極上の白こし餡が舌の上で溶け合うと、幸福のあまり気が遠くなる。

「これを食べないなんて、もったいない」

庭から響く虫の声を聞きながら、うっとりとした眼をした。

仙之助は、屋敷に戻るなり「用事を思い出した」と言い出して、実家である柳亭へそ

そくさと出かけてしまったのだった。

そんなことを言って、仲町へ梅奴だか染吉だかに会いに行っているのではあるまいか、とも思うのだが、菓子を食べていいという許しも得たので不満はない。下男の高蔵と、女中のお江津にもお裾分けをして大層喜ばれた。主の面妖な趣味に付き合わされるのは厄介だが、こういう役得は大歓迎だ、などと思っていると、夕焼けを背負った当の主が、勝手口にひよっこり顔をのぞかせた。

「あら旦那様、そんなところから。お帰りなさいませ……」

「ああっ、そんなに平らげちまって！」

悲鳴のような声を発した仙之助が、駆け寄ってくるなり笹折を覗き込んだ。

「六つもあったのに、一つしか残っていないじゃないか」

「だって、高蔵さんたちにも分けましたから。それに、食べていいとおっしゃったじゃありませんか。半分は旦那様が持つてお出かけになったんだし」

「お前ねえ、だからって本当に全部食べる奴があるか？ 残りの菓子は染と梅にやったんだよ。これでいくらすると思っているんだ。遠慮というものを知らんのか、まったくもう」

「いいじゃありませんか。私が体を張ったご褒美なんですよ？」

何よ、けちけちと、とお凧が黒文字を最後の一つに伸ばしかけると、仙之助が慌てふためいて笹折を奪い取り、きつと睨んだ。

「お前、怒っているんだな。私が仲町で遊んできたと思っっているんだらう」

「違うんですか？」

「違っていないことはない」
どっちだ。

「しかし、ちよつと顔を見てきただけだ。いや、梅たちがどうしてもというんで、差しつ差されつして少々遊んだけどさ。何しろ浅草まで行ってきたんだから、長居する暇もなかったんだよ」

「あら、本当に浅草へお出でになつていたんですか。てつきり仲町に入り浸つておられるものだとばかり」

「お前はもう少し主を信用しなさい」

なんとという女中だ、と仙之助が嘆かわしげに天を仰ぐ。

「ですが、早くお帰りにならなくともよかつたんじゃないやありませんか。御用はもう終わつたんですよね？」

買出しから戻つたお江津が台所に現れたので、夕餉の支度にかかろうと腰を上げる。

仙之助は、青の濃淡が美しい桔梗の練り切りを頬張りながら首を傾げた。

「うん、まあね。でも、本命は違うんだな」

「本命って、なんですか」

たすき掛けをしながら尋ねるお凧に、青年は口をもぐもぐさせ、うーん、と唸る。

「そのうちにわかる、かな。たぶん。……いや、うまいねえこれ。あーあ、全部食べちゃまって。うちの奉公人は血も涙もない。藤吉さんを見習つて欲しいよ」

ほやく仙之助を、お凧は煙に巻かれた心地で眺めていた。

生温かい闇が体を包んでいる。そよとも風が吹かぬ、無音の世界。体が闇に溶けてしまったかに思われ、上も下も覚束ない。己が誰であったのかも思い出せない。静かな暗い水のような闇を夢うつつで漂っていると、ふわり、と赤く透き通つた羽衣のようなものが眼前を過つた。赤く美しい金魚の尾鰭だ。琉金だろうか、長い尾鰭が優雅に舞う。闇を背景に赤く輝く金魚の姿を、どこかで見た気がする。ああ、お菊様の帯だった。尾鰭が波打ち、伸びていく。長く長く伸びていく。目にも鮮やかな真紅の幕に似たものが、視界いっぱい広がる……

曖昧糊糊としていた意識が唐突に焦点を結ぶ。その刹那、お凜は戦慄と共に喉いっばいに叫んだ。

艶やかな赤い振袖が、血の色の火を噴きながら、闇を焦がさんばかりにごうごうと燃え上がっていた。

「火事だあ！」

富蔵の割れ鐘を突く大声にお凜は飛び起きた。

「お江津さん！」

「たいへんだ」

隣で寝ていたお江津も跳ね起きる気配がする。

途端、自分の手も杳として見えぬ女中部屋の闇に、燃え上がる振袖の残像が浮かぶ。

——まさか。

先を争うように部屋を飛び出した二人は、全速力で廊下を走った。茶の間の外の縁側の雨戸が何枚か開いている。そこから外を見るなり、あつ、とお凜は立ち竦んだ。

あの振袖が、土の上で禍々しい黒煙を立てて燃え上がっている。

水を、とお江津が叫ぶ声をぼんやりと聞いた時、すごい勢いで庭を走ってくる影を見た。炎に一瞬浮かび上がったのは、手桶を抱えた仙之助だ。

仙之助がその手桶を思い切りよく振る。飛び出した水が生きもののごとく宙に広がり、月光を受けて白く輝きながら弧を描く。かと思うと炎にざんぶと襲いかかり、赤い火が瞬く間にかき消えた。少し遅れて、やはり手桶を抱えた富蔵が猛然と走ってきて、駄目押しの水をさらに浴びせる。

富蔵の喘ぐ息だけが、しんと静まり返った暗い庭に響く。どうやら大方の火は消えたらしい。焦げ臭い煙を立ち上らせる振袖に、もう火の気配はなかった。

「やれやれ。ま、こんなものかな」

振袖のそばにしゃがみ込み、仙之助が落ち着いた声で言った。

「振袖が、燃えた……」

呆然と呟いて、お凜は己の膝がかたかたとふるえているのに気がついた。

——燃やしてやる。

呻くような女の声が聞こえた気がしてきくりとする。

空耳だ、と思いつながら、足のふるえを抑えることができなかった。